

カビーノ邸ていからミルカを助け出し、ご禁制きんせいのハムが発見された後のこと。

シアとセルリスは人捜しひとさが依頼が出ていないか、二人で調べることになった。

ラックの屋敷やしきから、冒険者ギルドに向かう途中、シアが尋ねる。たず

「セルリスさんは、人捜し依頼の経験はありますか？」

「全くないわ。人捜しどころか、冒険者ギルドのクエスト自体ほとんど……シアさんはもうベテランなのよね。

「同じ年なのに」

セルリスは尊敬そんけいのまなざしをシアに向ける。

同世代の少女からの尊敬の視線に、シアは少し照れた。二人の関係は非常にぎこちない。セルリスからみれば、シアは同年齢でありながらブラックのベテラン冒険者。

シアからみれば、セルリスは貴族で英雄ゴランの娘。互^{たが}いにさん付けをしつつ、微^び妙^みな距^{きょ}離^り感^{かん}を保^{たも}っていた。

冒険者ギルドにもう少しで到着するとう時になつて、少し離れたところで叫^{さけ}び声^{こゑ}が上がる。

「どろぼー！ 誰^{だれ}か捕^{つか}まえてくれ！」

身なりのよさげな商人がひったくりにあつたようだ。一瞬でシアが素^す早^ばい身^みのこなしでひったくりの前へと

回り込む。

剣を腰に差したシアを見て、ひったくりは方向転換して逃げようとした。

その前にセルリスが立ち塞がる。

「どけ！」

お嬢様じょうじやまに見えるセルリスを突き飛ばそうとしたひったくりは、一瞬で宙ちゆうに舞まった。

セルリスが腕うでを搦つかんで投げ飛ばしたのだ。

「てめえ！」

セルリスの背後から別の男が襲おそいかかる。ひったくりはペアで行動していたようだ。

その男に首元に、シアが短刀たんとうを突きつけた。

「大人おとなしくするでありますよ」

二人組のひったくりを素早く拘束こうそくしたことで、周囲から大きな歓声かんせいが上がった。

「シアさん、やったわね！」

「セルリスさんも、すぐくよい動きだったでありますよ」

そして互いに握手をする。

「私のことはセルリスって呼んで」

「じゃあ、あたしのこともシアって呼んでほしいでありますよ」

「シア、じゃあ、いこっか」

「そうでありますね、セルリス！」

そして、二人は互いに微笑^{ほほえ}みあつた。
ひつたくりを二人で協力して捕まえることで、一気に
仲よくなつたのだつた。